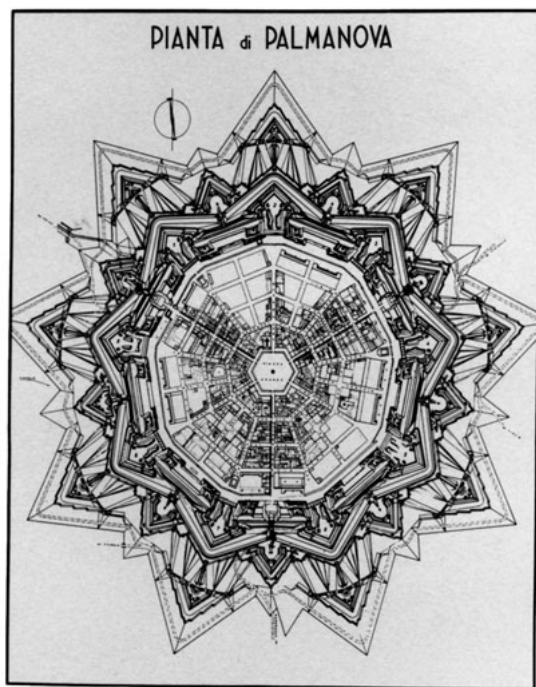


鴨 東 通 信

春

2012.4 No.85



●東山歴史逍遙 其三

仲源寺を再建した僧のはなし

村上紀夫

●ていたいむ

衣服が語る女性学―着衣する身体からの問いかけ

武田佐知子

●エッセイ

写本学における困難な説明―光源氏系図・古筆切―

藤本孝一

現代に生きるイタリア・ルネサンスの城

白幡俊輔

岡倉覚三とヴィヴエーカーナンダ

清水恵美子

●リレー連載 世界のなかの日本研究10

白隠学―世界の知的遺産として ベッカー ヤン・クレメンス

●史料探訪

鳥羽田中殿金剛心院出土「鴛鴦文飾金具」

山本雅和



粧 2002

森田りえ子
作品集
Art Works of MORITA Rieko
1979 - 2011

今、最も注目されている日本画家の、
初期作品から最新作までを
集大成した待望の作品集。



平成 24年
4月刊行

著 者 森田りえ子
判 型 A4判変型(297×225mm)
上製本・函入
総 頁 356頁
定 価 25,200円(税5%込)
ISBN978-4-7842-1596-6 C0071

歳末に顔見世興行で賑わう南座、その東側に仲源寺がある。
「めやみ地蔵」という通称の方がよく知られているかもしれない。

元禄九年（一六九六）に当時の仲源寺住職が本山の知恩院に届けた由緒によれば、近世初頭に少し移動したとあるので、中世には現在よりも河原に近い場所にあったのかもしれない。場所はまだ定かではないが、地蔵堂は田のほとりにあって「畔の地蔵」と呼ばれた惣堂だったといわれる。

「畔の地蔵」様は、みるみる遊興の地と変貌を遂げていく四条河原の様子に

仲源寺を再建した僧のはなし

驚いていたに違いない。それに対し、地蔵堂は次第に衰微してしまつたようで、一七世紀半ばにはすっかり大破していた。それを漕誉（そうご）（『京都坊目誌』では満誉）という僧が人々から奉加（ほうか）を募って、万治三年（一六六〇）に再建したという。

漕誉は、本山に古いことはわからないと報告しているが、近世の地誌には様々な伝承が記されるようになる。例えば、地蔵の告げ通りに弁財天と禹王廟を祀ると鴨川の洪水がおさまった

という。また、地蔵は地中から出現したとも、眼病の治癒にご利益があるとも伝えられる。

記録が残っていないというのにこれはどうしたことだろう。

漕誉による再建から二六年后に書かれた『雍州府志』には「寺僧伝え言う」とか「縁起曰く」と書かれている。当時はまだ漕誉が現役だった。つまり、荒廃していた仲源寺を勧進によって再建した漕誉が、地蔵のご利益の宣伝に努めていたということだろう。同じ頃

の『出来齋京土産』という書物には「目疾地蔵」と書いたお札を出していたともいうから、眼病治療をご利益として全面的に売り出していたようだ。

多くの人々に親しまれ、信仰を集めている仲源寺。その基礎をつくつたのは一七世紀に大破した地蔵堂に入り、その再建に尽力した漕誉だった。京都で庶民の信仰を集める辻々にあるお堂の多くは、漕誉のような宗教者によって支えられていたのである。（むらかみ・のりお・大阪人権博物館学芸員）

東山

歴史逍遙

村上紀夫

（其三）

歴史豊かな京都・東山の地への事務所移転にちなんで、気鋭の歴史研究者による東山が舞台の歴史エピソードを、連載でご紹介します

（全四回）

●女性学リレー講義と「着衣する身体」

——はじめに、本書『着衣する身体と女性の周縁化』のもととなったプロジェクトの経緯についてお聞かせください。

一五年ほど前、大阪外国語大学（現大阪大学、以下外大）の先生たちを集めて女性学のリレー講義をはじめたんです。外大は当時、女性の教員が日本一多かったんですよ。しかも女子学生が七割という構成でした。女の子たちの多い大学で女性教官もこんなにいるのだから、全体として何か後輩である女子学生たちに語りかけられないかということで、私が音頭をとって始めました。そうしたら外大一の人気授業になりました。受講者を抽選で選ぶくらいに人が集まりました。

そのときには女性学の本はたくさん出ていたけれども、外大ほどあらゆるフィールドの教官が集まっているところはなかったですね。

外大のひとりひとりの先生たちに、聞いたことのない、絶対に行けないような土地の女性の話を聞くとすごくおもしろいわけです。しかも先生たちはその土地の言葉を分かっていますから、書かれた記録ではなくて、等身大の、生の

ていーたいむ

衣服が語る女性学

——着衣する身体からの問いかけ——

たけ だ さ ち こ
武田佐知子
(大阪大学教授)

言葉をやりとりして彼女たちが肌で感じてきたことを話してくれるのです。

私なんかは語学が不得意だから、外国の人と流暢に話すことは出来ないけれども、そういう語学の才能のある人が自分の言葉でやりとりしてきたことはとても刺激的で、これを後輩の女の子たちにぜひ伝えなければということで、そのリレー講義を始めたんです。

その内容は『地球のおんなたち』という本にもなりました（「1 女から女へ、女を語る」・『2 二一世紀の女から二一世紀の女へ』嵯峨野書院、一九九六・二〇〇一年）。その経験をもとに、人に伝えるだけでなく研究もしようということ、文部科学省の科学研究費補助金をいただいて研究会を始めました。上野千鶴子さんをはじめとして、いろいろな先生を講師に迎えた講演会も行いました。それらは外大の先生たちにとっても大きな刺激になりました。

——それまで女性学を専門としていなかった教官の方々が、本プロジェクトを通じて改めて「女性」について考えはじめたわけですね。

研究会の中でいろいろな地域、いろいろなフィールドの話をお互いに聞くわけです。そこ

で目がマクロになって、こういう切り口、こういう見方もできるんだということを、たくさん学ぶことができました。それを自分のフィールドに持ち帰った結果が、この論集に繋がっています。皆さん自分は女性学が専門じゃないという風におっしゃるのですが、同じ女性としてあるいは男性としても、考えてみるっていうことは有効だと思います。

——同じように、異なる分野を専門としていた方々が、衣服について考えてみた成果が本書ですね。

衣服というのは、人間に絶対に共通の要素なんですよ。衣服を着ていない人たちはいないのですから。それを軸として考えたらどうなるかということで、改めて研究会をはじめたのです。

「国家を考えろ」とか「共同体を考えろ」とかそんな大上段なものではなく、誰もが着ている衣服について、あなたたちの目を通してその地域の女性をもう一回考えてみようという問いかけ・共通の問題意識ですよね。卑近なというか小さいというか、形而下の問題だからこそ、とつかかりとしてはいい素材だったと思います。

その一連の講演会で若桑みどり先生にも来ていただきました。そのとき私は大阪大学の副学長になることが内定していて、このプロジェクトにどの程度集中できるかわからないということがす



ごく不安だったので、お弟子さんのたくさんいる若桑先生に、東京分科会のようなかたちで、「着衣する身体」というテーマで研究していつてくれないかとお願いしたんですよ。それが二〇〇七年六月ごろでした。

ところがその年の一〇月に突然先生がお亡くなりになってしまいました。お弟子さんたちもすぐショックを受けておられました。が、若桑先生が亡くなられても、東京で研究会を続けてほしいという気持ちはずっと変わらないと、先生のお葬式に伺ったときに申し上げました。それから引き継いで、熱心に研究会を行ってくださったのです。

●衣服と身体

——先生ご自身は、昔から衣装について研究されてましたね。

修士論文では古代家族論をテーマに取り上げたし、博士過程でも引き続き家族の問題を研究しようと思っていたんです。ところがあるとき、女子美術大学から、日本刺繍科の学生たちに服装史の授業をしてほしいという話をいただいたのです。一度もやったことがないので、はじめは断るつもりでしたが、調べてみたら面白くて、これなら私でもできるかもしれないと思いました。それまでの服装史は、このごろはそうでもないんですけど、

有職故実とか家政学の堅い論文が多かったです。それから女子美は先生たちがみんな実技の人ばかりで、紀要に論文を書く人が少なかったんです。それで、普通の大学では紀要を非常勤講師には開放してくれないのに、いくらでも書いてくださいといわれて、毎回毎回一〇〇枚ずつ服装史の論文を書いていた。四回書いたらもう四〇〇枚ですから、それで本ができてしまったのです。それがきっかけで、衣服でやっていること、方向転換しました。

また本書では身体ももうひとつのテーマとしています。衣服だけじゃなく、いろんな身体表現——刺青もあればボディペインティングだってそうだし、性転換だってそうだし、髪の毛をどうするかとか、爪をどうするかとか、それぞれ一つの表現であり、主張になるわけだから、そういうあらゆることを対象にしたいと思っただけです。隠す、隠さないも表現の一つになりますし、隠すだけじゃなくて、脱ぐこと、裸であることの意味も、着ることからはじめて見えてくる問題です。それは身体という軸を持っていないと、衣服だけをやっていたのでは見えてこないのです。

私は外見が内面を規定するとやっぱり思います。どんなに崇高な志でいても、ボロ着てられたらね(笑)。

服装というのは表現でしょう。制服のような同じくくりのなかの衣服も、「そこに属する」という意思表示、表現になる。それに加えて、制服でも着こなしによって個を表現できる。リボンの結び方ひとつでも、ダーツの入れ方ひとつでも、スカートの丈の長さでも。また、同じ衣服でも時間の経過によって、見るグループ

によって符号が違ってきます。どんどんどんどん変化していくんですよ。だから新しいものが古くなって、プラスの価値からマイナスへ転化していくこともある。同じものにまったく違う意味と符号が付与されることがあって、そこもおもしろいですよね。

●衣服から社会・歴史を考える

——これからの展開は。

今は大阪大学で若い教員や学生を集めて、いろいろなことにトライしています。昨年ズボンとスカートの比較文化論という授業を行ったら、たくさんの方が来てくれました。

一九七〇年代に、阪大ではジーンズ事件というのがありました。文学部でアメリカ人の先生が、授業に入ってきた女の子がジーンズを履いていたのを見つけて、ジーンズを履いた学生に聞かせる授業はないって、追い出したんですよ。それがマスコミにもとりあげられて、大問題になりました。

その阪大ジーンズ事件から始めて、ヨーロッパでのズボンの意味、スカートの意味、ズボンとスカートの性的標識であるのはヨーロッパだけの話であって、家父長権のシンボルとしてのズボンと、それに従属する女性のシンボルとしてのスカートという図式が、世界的には本当に有効かどうかということを考えてみようとなりました。日本なんてまったく当てはまりませんから。

大体ギリシア・ローマは男も女もスカートだったのに、中国周

辺の騎馬民族に乘馬の道具として発明されたズボンが戦闘服としてヨーロッパに入っていて、家父長権が確立しているヨーロッパ社会にはそれが男性の占有物として受け取られました。万里の長城を作って騎馬民族の侵入を防ごうとしたんだけど、やはりズボンを履いて、馬に乗って、弓を射ないとこれらには勝てないということで、中国人は一生懸命ズボンを履いて弓の練習をするんですね。

漢民族もそもそも男女ともに、スカートを履いていたのですが、そこへだんだんズボンが入っていったのです。

日本といえば、蒸し暑い国ですから、みんな貫頭衣、つまりスカートを着ていました。そこへズボンが入ってきて、権威の象徴となりました。埴輪が履いているようなだぶだぶのズボンです。律令国家は聖徳太子像に見られるような衣服を中国から入れて、徐々にズボンが普及していきます。

でも鎖国している間は、例えば江戸時代の武士なんかは袴袴姿ですが、お家に帰ったら着流しの着物です。着流しの着物というのはスカートなんですよね。それは一体なぜなのか。日本はやはりスカート文化であつたのではないか、騎馬民族はやはり日本に来ていなのではないかと、色々理屈がこねられるんですよ。

今度阪大の若い先生たち、大学院生を動員して、そういうズボ



ンとスカートの文化論のプロジェクトをつくってみようと思っているんです。若い先生たちのモチベーションを高め、そして研究成果を発表する場をつくって行きたいと考えています。

——先生が本書を通じて伝えたいことは何でしょうか。

衣服を通じて見えるものがたくさんあるということ、読み取る気さえあれば、衣服は非常に能弁だということですね。日常生活の中でも衣服の意味はとても大きいんだということを知ってもらいたいです。

私は、衣服というのは社会と歴史を考えるのに非常に有効な手段だと思っています。今回私たちが研究の切り口として提供できたことよりもっとたくさん、衣服あるいは身体を通じて、多くのことがいえると思います。自分にひきつけて、もう一度考えてほしいのです。

本書は決して到達点でもなんでもなくて、こういう見方、視点、切り口があるということを示したにすぎません。自分の研究のフィールドで衣服・身体を軸に考えてみたらどういうことになるかということを、読者が考えてくれたら嬉しいのです。歴史学のようには完成されたノウハウのある研究分野ではないので、完成型ではない部分も多いのですが、ともかくこれが第一歩です。次のステップを考えてもらえたら、と思います。

(二〇二二年二月一六日 於・大阪大学)

写本学における困難な説明——光源氏系図・古筆切——

藤^{ふじ}本^{もと}孝^{こう}一^{いち}

写本を物理学的に見る方法を基礎にした写本学を、筆者は提唱している。しかし、写本自体を調査しているため、文章による報告では理解してもらえない場合が多い。実物を言葉だけで説明することの難しさを、和歌文学会第五七回大会研究発表（平成二十三年一〇月三〇日）で、二件ほど痛感した。

一件目は、筆者発表「擬定家本について」である。筆跡や装訂から、二条家庶流にあった定家監督本『郁芳門院安芸集』を親本にして、冒頭一丁を定家様に書くことと大和綴の装訂が共通する擬定家本の発生をみたことを提案した。それに対して、久保木秀夫氏は『安芸集』を擬定家本から切り離して考えるべきである、と発言された。筆者としては、紙質が同じであるとしか答えようがなかったためか、納得されなかったようである。冷泉家御文庫の私家集の中に『安芸集』を位置附けると、紙質・装訂・書法などから擬定家本以外にないと断定できるのである。また、擬定家本全体は『冷泉家 王朝和歌守展』（平成二十二年）に出品し、図録に掲載してあるため、理解していただいていると思ひ込んでいた。実証の難しさは、例えば久保木氏等が鎌倉時代写本と紹介した

国文学研究資料館蔵『光源氏系図』一卷を、私が江戸時代写本である（『大島本源氏物語の再検討』、平成二十一年一〇月刊、と記述したことに対して、座談会で「言い掛かりですよね」（『武蔵野文学』二〇一〇年増刊夏号）という発言があった。同館『源氏物語展』（平成二十一年一〇月開催）展示委員会で、『系図』が出て、発言の人に折本になっていた時期があり、江戸時代の写本であることを説明したが、忘れてしまったようである。再度の確認をしてもあればすっきりとわかると思う。図録に鎌倉時代としているため同館の人に根拠を聞くと、美術史研究者に確認したところ、墨流し等から鎌倉時代であるとの意見をえたとの話であった。そこで『再検討』で墨流しを取上げたのである。同じ墨流し料紙は、冷泉為村が明和四年（一七六七）書写監督した源氏物語の表紙（『第二〇回関西の書家百人展 併催冷泉家歴代定家様の書』一四九頁、産経新聞社、平成一五年刊）と比較すれば納得していただける。

『系図』を手には、漉き方から一目瞭然に判断ができる。さらに、紙を光に透かすと繊維の形成がはっきり見える。漉き方は、安土桃山時代前後を境に技術の発達があった。中世

以前は溜漉^{ながす}で、近世以降は現在も使われている流漉^{ながす}である。溜漉は、漉き舟から繊維を掬い上げるだけで、繊維が平均化していない。筆者は、平安時代から鎌倉時代にかけては、簀桁^{すけた}（掬い上げる杵）の中に繊維を直接流し込んで、手で掻き回し均一化してから簀桁を上げるのではないかと考えている。それは、この時代の紙を透過光で見ると、繊維の塊が円形に流れている形状からの想定である。室町時代頃になると、漉き舟に繊維を入れて、簀桁で掬い上げるのではなからうか。

江戸時代に入ると、漉き舟から繊維を掬い上げる時、均一化するために左右上下に簀桁を動かす流漉になる。流漉は繊維が縦横に流れているのが表面からでも分かる。紙による時代判定が今のところ一番確実であろう。擬定家本『安芸集』と他の家集とを透過光で見るとほぼ同質の一群の写本であることが分かる。

言葉で写本自体を説明するのが難しい。次の一件は、擬定家本と同じく一群として捉えることの話である。

二件目は、久保木氏が「永延二年藤原実資後度歌合に関する古筆資料をめぐって」の「資料2 乙本（俊忠筆断簡）」を図版で示し、再度「藤原定家筆？書き入れ部分」を掲載され、これが定家筆かどうかの問題を検討された。質疑に入って、突然に司会者から指名された。「自信を持って定家の筆跡が判らないことを確信しているのは私です。」と、分けの分からないことを言ってしまった。定家以外にも書き込みをして校訂をしていた人がいたはずで、筆跡からは確定できない旨を述べた。

しかし、答えるべきは、平安時代写本の古筆切の校訂追記が定家筆の可能性があるかどうかである。それは、可能性があると答えるべきであった。その理由を述べてみたい。

まず、古筆伝来全体像から残存状態を推量すべきである。平安時代後期から鎌倉時代前期にかけての伝存古筆切のほとんどは冷泉家伝来歌書類であると筆者は想定している。最大の理由は、応仁の乱による歌書類の焼失である。和歌の家柄である二条家も没落していて、当時の和歌を伝える人や家柄は一条兼良や飛鳥井家となった。両方とも戦火で蔵書を焼失している。和歌の家柄で、応仁の乱をかくぐったのは冷泉家が唯一といっても過言でない。冷泉家では、安土桃山から江戸時代前期の定家尊重と古筆大流行の影響で大量の歌書類が散逸する被害に遭ったため、典籍蔵の御文庫の扉が寛文五年（一六六五）頃に閉められた。このような状況のもとに、この古筆切も冷泉家からの散逸の古筆切として考えられる。

この歌合は『扶桑和歌抄』と関係があるという。『扶桑和歌抄』編纂は為相の蔵書をもとにしてしていると推測されている。

筆者は定家周辺には右筆や校訂者があり、盛んに写本制作や校訂をしていたと想定している。例えば、『冷泉家展』で定家表紙を集めて展示すると、明らかに定家以外の人物が定家様で書いた外題が見るのである。このような定家工房的なことを考えれば、この古筆切が冷泉家伝来本の一部であったと思われる。

大会の補足をする次第である。

（龍谷大学客員教授）

現代に生きるイタリア・ルネサンスの城

白幡俊輔
しろ はた しゅん すけ

それは二〇〇五年、南イタリアの港町プリンディシのことだった。当時私はローマ大学に留学中で、ルネサンス建築史が専門のF・P・フィオーレ教授の下で勉強をしていた。教授の「文献調査もよいが、本物の建築をたくさん見なさい」という言葉を都合よく解釈した私は、図書館で本を読むよりもつばらイタリア各地に出かけては、ルネサンスの町や城砦を見て回っていたのである。旧市街にそびえるプリンディシ城の城門の写真を撮っていた時、事件が起こった。

「あなた写真を撮りましたね？」とイタリア語で質問してきたのは、モスグリーンの制服にベレー帽姿の女性兵士である。「ここは撮影禁止です。まさか内部の建物を撮影していないでしょうね？」という声は詰問調であった。背後には険しい顔の男性兵士が無言で控えている。私はあわてて城門を撮っただけであること、ローマ大学の学生で、建築史を学んでいることを告げると、彼女は「撮った写真を見せなさい」と言ってきた。私としてはデジタルカメラを差し出すしかない。「この写真は駄目です。削除しなさい」。そう言われたのは、開いた城門から内部の建物が映り込

んだ一コマである。

それまでまったく気付かなかった私もうかつだが、よく見ればそこにはイタリア海軍の施設である旨や、撮影禁止の看板、さらに警備兵の姿や内部の施設が写っている。削除されたのは警備上の対岸に行きなさい」の理由であろう。「城の写真が撮りたいなら、港の対岸に行きなさい」。写真が削除されたのを確認した女性兵は穏やかに、しかしきっぱりそう言った。これ以上ここで写真を撮影すれば逮捕・拘留すら厭わない空気が、その厳しい視線からは感じられた。

言われたとおり港の対岸からプリンディシ城を眺めて驚いた。城には通信塔が増設され、すぐ近くの突堤には巨大な軍艦が停泊している。あとで知ったことだが、プリンディシは現在でも重要なイタリア海軍の軍港であった。私は歴史的建築物と思い込んでいたが、プリンディシ城は、いまだに現役の「城」だったのだ。今の日本では昔の城が軍事基地として使われ、写真撮影を軍人に制止されることなど想像もできない。しかし私はその後もイタリアで、たびたび中世の城が陸軍や海軍の基地となっていて見学で

きないという体験をした。さすがにもう写真を撮ろうとは思わなかったが。

軍事基地について多かったのは「監獄」である。一度はフィレンツェ近郊の中世都市ヴォルテッラ、もう一つはエミリア・ロマーニャ州のフォルリで、写真撮影を警官に制止されるということがあった。どちらも中世の城砦がほぼその外見を留めたまま、刑務所として使われていたのだ。

そもそも城砦とは、もともと監獄でもあった。英語で「地下牢」を意味する *ungeon* は、城の「本丸」を意味する古フランス語 *doujon* から来ており、城の地下が監獄になっているのはいわばヨーロッパの常識である。

イタリア中部にサンレオという小さな城砦があるが、最寄りの鉄道駅から車で一時間以上という辺鄙な場所にも関わらず観光客が多い。というのも、かつてこの城に収監された有名な詐欺師「カリオストロ伯爵」（宮崎駿監督のアニメ映画『カリオストロの城』のモデルにもなった人物）の監房を見るためである。城がかつて監獄であったことは十分知っていた私も、イタリアではいまだに刑務所として使われているものもあると知って驚かざるを得なかった。もともと、築城術など中世の軍事技術が、西洋の近代化に及ぼした影響を考察するのが、私の研究のテーマである。だが、イタリアの城は近代どころか現代になっても、なお軍事基地や監獄といった建設当時の役割を果たしている。これは一体どういうことなのだろうか。

フランスの思想家ミシェル・フーコーは著書『監獄の誕生』の中で、近代の組織（軍隊・学校・工場・病院など）は、監獄に代表される「監視・規則・矯正」という原理によって作動していると主張した。太陽の運行や四季といった自然のテンポにしたがって生きた中世の人々とは違い、近代人は規則に従って行動するよう監視され、内心もそれに順応させられている、というわけだ。

しかし、イタリアの例をみると、その原理は近代に特有なものなのかという疑問がわく。一五世紀末に活躍した建築家フランチェスコ・デイ・ジョルジョは、「城主は全てを監視する高い塔に住み、家臣はその下に住む。この設計ならば、もし謀反などがおこつても容易く鎮圧できる」と説いている。これは、まさにフーコーが近代社会の構造にたとえた、一極集中で全体を監視できる現代の刑務所そのものだ。

とすると、フーコーのいう近代の原理自体、さほど近代的ともいえないことになる。あるいは、イタリアではなんと一五世紀にすでに「近代システム」が生まれていたことになるのだろうか。イタリアの城が現在でも軍隊や監獄のために使われているのは、そこに内包された近代的な設計原理が現代社会でもなお有効だからなのだろうか。

しかし当のイタリア人にこうした疑問をぶつけても、案外「なに、昔からここは牢屋だったというだけさ」と答えそうな気もする。とはいえ中世・ルネサンスの城砦に対する私の疑問は、まだまだ尽きそうにもないのである。

（関西学院大学客員研究員）

岡倉覚三とヴィヴェーカーナンダ

清水恵美子

岡倉覚三（天心）は、一九〇一年二月に日本を出発し、翌年一〇月までインドで過ごした。そこで、一人のヒンドゥー僧と交流を持つこととなった。一八九三年シカゴで開催された万国宗教会議で演説を行い、脚光を浴びたスワミ・ヴィヴェーカーナンダ（一八六三—一九〇二）である。

周知の通り岡倉は、一八九八年東京美術学校校長職を退き、連袂辞職した教授連と日本美術院を設立した。試行錯誤の上、横山大観や菱田春草らが生み出した没線描法は、日本画の伝統技法から逸脱するものとして「朦朧体」と非難を浴び、日本美術院の財政は苦境に陥った。彼が渡印したのは、まさにこのようなときであった。先行研究や伝記によると、渡印には人生における挫折、美術史の構築、仏教復興と仏跡巡礼という複数の動機があったと考えられる。注目すべきは、美術的動機と宗教的動機が結びついていることだ。このことは、美術思想家と仏教者「雪信」（岡倉の戒号）という二つの顔を切り離さずに、インドでの活動を見ていく必要性を示唆している。

一九〇二年一月六日にカルカッタ（現コルカタ）に到着した岡

倉は、ラーマクリシュナ・ミッシェンの本部ベル・マトにて、ヴィヴェーカーナンダと対面を果たす。

岡倉が感銘を受けたのは、ヴィヴェーカーナンダが「東西を湊合して不二法門を説破」したことであった。彼は万国宗教会議で、多岐にわたる思想にも中心や共通の基盤があり、それがヴェーダであると説いた。ヴェーダとは靈性の法則の宝庫であり、インドで起こった多くの宗派は、全てヴェーダの信仰の中に吸収され、同化されたという。さらに魂の必然的な結論は「アドヴァイタ（単一）」であり、宗教の目標は多様性と二元性を経て、究極の単一性に到達することだと主張した。アドヴァイタは、神と魂と宇宙は一つのものであると説くヴェーダーンタ哲学の一派である。ヴィヴェーカーナンダは、二元論は不二一元論に至る一段階であり、不二一元論を通してのみ、人格神という様々な二元論的觀念が調和されると訴えたのである。

ヴィヴェーカーナンダは一八九九年、不二一元論の修業を通して靈性の生活を開發することを目的に、ヒマラヤの山中マヤーヴァティーにアドヴァイタ・アーシラムを設立していた。一九

○二年五月五日、岡倉はスワミの信徒らとともに、マヤーヴァティーに向かう。そこから岡倉が日本美術院に宛てた書簡には「空気清爽 朝夕は初冬の寒さを覚エ候 山深く候へば猿鹿往々路を遮り夜半月中遠く虎の声を聞くことあり 同行印度沙門一人(阿毘羅難陀)」と僕伽楼あり 伽楼頗る老実 小子身廻りの世話能く届き何も不自由を感じず候 身体頗る強健は亦御安神被下度候」とある。彼が「空気清爽」な大自然の懷に抱かれて、「身体頗る強健」となり、靈的活力に満ち溢れた生活を送っていた様子が伝わってくる。この体験の影響は *The Ideals of the East* (1903) に表れている。

『アドヴァイタ』という語は、二でない状態を意味し、すべて存在するものは、外見が多様であっても、本当は一だという偉大なインドの教義に用いられた名前である。それゆえ、あらゆる真実はいかなる単一の分化の中でも発見されねばならず、全宇宙はあらゆる細部の中に含まれている。したがって、全てが等しく貴重なものとなるのだ。

さらに岡倉は、近代国家の生活を強いられても日本が自らを維持できたのは、祖先から教育を受けた「アドヴァイタ」の理念の根本的原理があったからであり、東洋文化の本能的な折衷主義によって、この国は現代ヨーロッパの雑多な要素から取捨選択の判断ができたと述べた。ヴェーダーンタが説く「アドヴァイタ」という礎の上に、日本と「アジア」の靈的融合を感じ、多様の中の単一性を意識したことは、「脱亜」の思想が国民意識として定着

していく中で、岡倉の思想が反対のベクトル——日本を「アジア」に位置づける方向——に向かったことを意味している。

ヴィヴェーカーナンダの「東西を湊合」する思想には、宗教の調和の理想も含まれている。彼は、万国宗教会議で「源を異にするさまざまな流れが、すべて海で混ざり合うように、おお主よ、異なる傾向を持つ人々が辿る道はさまざまで、曲がったりまっすぐだったり、それぞれ異なるように見えるけれど、すべてはあなたに通じています」という讃歌を引き、宗教の調和を訴えた。彼にとって、あらゆる宗教はそれぞれの信者を等しく導く有効な道であり、同じ完成という目標に至る数々の道に向かうものであった。祖先の真理を西洋世界に示しつつ、東洋思想と西洋思想の持つ普遍的要素を認め、その健全な交流を願ったのである。このような調和の理想は、西洋美術と東洋美術とを結びつけて新しい美術を創出するという理想を目指し、奮闘し続ける岡倉にとって、おおいに共感できるものであったに違いない。

帰国後、岡倉は都塵から離れた茨城県五浦に土地を求め、一九〇四年二月渡米し、ボストン美術館での勤務を開始する。ベル・マトやアドヴァイタ・アーシユラムでの生活は、岡倉に自然の中で瞑想し、靈的活力を得られる聖域を求めさせたのではないだろうか。ボストンという新しい俗世間で仕事に取り組み、再起を図るために——。そこに筆者は「雪信」の「真俗二諦」の生き方を見るのである。

(お茶の水女子大学特任リサーチ・フェロー)

白隠学——世界の知的遺産として——ベッカー ヤン・クレメンス

臨済宗の中興の祖といわれる白隠慧鶴はくいんえいかくぜん禪師（一六八五—一七六八）は、江戸時代中期に活躍した。臨済宗の今日の発展は、この白隠とその弟子たち抜きでは語れないほど、白隠は重要な位置を占めている。

一〇年以上前に私が白隠に対して学問的に興味を持ち始めた頃は、西洋には、白隠について詳しく研究した学術的な出版物がほとんどなかった。例えば、図書館やインターネットで白隠に関する文献を検索しても、出てくるのは、主に白隠の禅画についての書籍だった。そのほとんどの書籍においても、白隠のことはあまり詳しく書かれておらず、自伝から一般的な情報だけを繰り返し述べているものばかりだった。質素な生活をおくったこと、彼が臨済宗の公案を新しく体系化したこと、民衆にも分かりやすい言葉で仏の教えを広めたこと、それから禅画の有名な描き手であったこと、というふうにお決まりの簡単な記述にとどまっていることが多いのである。このような見方は基本的には間違っていないが、それは白隠の多面性をもつ人物像のほんの一部分であるにすぎず、真の人物像をすべて伝えているとは言えないのである。

白隠の主な著作、例えば『遠羅天釜』、『辺鄙以知吾』、『壁生草』などが、数十年前からすでに英語に翻訳されているのにもかかわらず、欧米の研究者たちは、白隠のテキストを分析することはほとんどなかった。また、それらがどのような社会的、政治的、歴史的な文脈において書かれたのか、つまり、白隠がどのような時代背景のもとで生き、書物を書き残したのか考察がなされることはなかったのである。

白隠についての詳しい欧米の文献がほとんどないので私は落胆したが、日本語で書かれた文献なら絶対あるはずだと思って探してみた。しかし残念ながら、日本語で書かれた学問的な文献も実は少ないということが分かった。他方で、日本では特に白隠の伝記（聖人伝）についての本や、健康を増進する内観法を説明する本はたくさんある。そして、欧米と同じように、白隠の禅画についての文献もたくさんある。しかし、白隠についての日本語の学問的な文献は、ほぼ五〇年前の一九六三年に書かれた陸川堆雲氏による『考証白隠禪師詳伝』と、ほんの数年前に出版された芳澤勝弘氏による『白隠禪師法語全集』以外には見当たらないのであ

る。日本においても、白隠の生涯とその著作を、その時代背景に沿って考察した学問的な文献が少ないのであれば、欧米ではなおさら少ないということは納得できる。

驚くべきことは、このように情報が比較的少ない状況であるにもかかわらず、欧米において、とりわけ白隠の禪画に関する書籍が大変多く出版されていることだ。これはおそらく、日本での白隠への関心のあり方を反映していると思われる。日本において白隠が世間に知られるようになったのは明治時代以降であるが、その時点においても白隠への関心は主にその禪画に限られていた。それゆえ、欧米においても、白隠への関心はまずその禪画に主に表れ、一九五〇年代のいわゆる「禪ブーム」が始まったと言うことができる。

西洋の初期の「禪ブーム」においては、「直感」と「無意識」を重視し、「形の無いものに形を与える」という鈴木大拙による禪画の解釈が一般に広まった。それは、ちょうどその時代にヨーロッパを席卷していたアンフォルメル芸術の主義主張と合致し、鈴木によるこのような禪画の価値判断が、ヨーロッパやアメリカの多くのアーティストによってこぞって取り上げられ、西洋芸術のなかに統合されてしまった。白隠のような禪画の描き手は、直感的で、すべてのドグマから解放された絵を創作した芸術家と考えられ、しかも、西洋よりも数百年も先にそれを成し遂げた先駆者と見なされた。禪画は、より高度な個人の自由と精神的な完成度を表すものと考えられたのである。このトレンドは、今日にお

いても廃れていない。

一九八〇年代に入ってからようやく、それまでの禪画の直観的な理解の仕方は一面的なものであって、禪画の歴史的、宗教的な背景がより重要な意味をもつということが理解され始めた。そして、このような背景について、少しずつ、学問的な考察がなされるようになって来た。白隠の描いた、物をモチーフとした絵について理解するためには、白隠の著作をもとにして白隠の思想について深く知らなければならぬのである。というのも、白隠は、絵に描いたものを、自身の著作の中でもよく述べている。つまり、絵は常にテキストと一緒に、その「文脈」の中で読み取る必要がある、別々に見て解釈すべきではないのである。

しかし、これは西洋人だけではなく日本人の研究者にとっても大きな問題である。というのも、白隠の著作を読んで理解する際の言語的な難しさに加えて、仏教の経典などに由来する背景を把握したり、その当時の様々な日常生活の側面について述べられていることを理解したりしなければならぬからである。それゆえ、白隠の全著作およびその豊かな知的遺産の全容を理解するには、できるだけ多くの異なる分野の研究者が協力して研究することが必要ではないだろうか。白隠研究はまだこれから発展する分野として大いに期待できると思う。

(ドイツ・チュービンゲン大学アジア地域文化研究所・

花園大学国際禪学研究所研究員)

史料

探訪

(48)

鳥羽田中殿金剛心院出土「鴛鴦文飾金具」えん おうもんかざりかなぐ

山本雅和やまもと まさかず

(京都市考古資料館 副館長)

京都市考古資料館は、京都市内における埋蔵文化財の調査成果を展示することにより、埋蔵文化財から見た京都の歴史を紹介することを目的として昭和五四年（一九七九）に開館した。平成一八年度以降は、京都市内の発掘調査を実施するために京都市が設立した財団法人京都市埋蔵文化財研究所が、指定管理者として管理運営にあたっている。

京都市考古資料館の建物は、京都高等工芸学校（現在の京都工芸繊維大学）教授であつた本野精吾氏の設計により、大正三年（一九一四）に建築された旧西陣織物館の寄付を受けたものである。煉瓦造三階建てで、外観・壁面意匠などに簡素な手法が用いられており、近代主義建築の先駆的作品として建築史上貴重な建物であることから、京都市登録有形文化財に指定されている。

現在、京都市内には旧石器時代から江戸時代にいたる約一千箇所の遺跡が知られている。中には日本史の舞台となった著名な遺跡が数多く含まれており、また、一つの場所で各時代の遺跡が重複していることが京都の遺跡の大きな特徴である。京都市考古資料館では、これらの遺跡の写真パネルや出土遺物・レプリカなど

により、二階の常設展示と一階の特別展示コーナーで「つちのこの京都」を紹介している。

鴛鴦文飾金具は、平安時代後期に平安京の南に造営された鳥羽田中殿金剛心院の発掘調査で出土した金属製品である。

平安時代後期は、古代から中世への大きな変革期であり、京都にあつても古代都城から中世都市へと変化する転換の時期であつた。平安京内では、政治の中枢施設であつた平安宮の荒廃がすみ、貴族の邸宅や庶民の住居は左京域を中核とする地域に集まり、右京域は耕作地として利用されるようになる。

一方、郊外の白河・鳥羽の地や法住寺殿では、新しい市街地が出現する。ここでは御所と御堂（寺院）が密接な関係に配置されるのが特徴で、白河では六勝寺（法勝寺・尊勝寺・最勝寺・円勝寺・成勝寺・延勝寺）と南殿（泉殿）・北殿、鳥羽では南殿と証金剛院、北殿と勝光明院、東殿と安楽寺院、泉殿と成菩提院、田中殿と金剛心院、法住寺殿では南殿・北殿と蓮華王院・最勝光院などが知られている。これらの巨大な寺院は、末法思想が広がるなか、極楽往生を願う上皇・皇族や高位の貴族たちにより発願され、



「鴛鴦文飾金具」(部分／京都市考古資料館蔵)

地方支配で財力を蓄えた受領層が造営を担った。

金剛心院は鳥羽上皇の発願になる寺院で、仁平三年(一一五三)に造営が開始され、翌四年に供養が執り行われている。鳥羽で最後に造営された寺院であり、寺域が東西約一六五メートル、南北約一七一メートルにおよぶ最大規模の寺院であることが発掘調査により明らかとなった。寺域内には中央の釈迦堂、南西側の九体阿弥陀堂をはじめ寢殿など十数棟の建物が配置され、南側に開いた池の汀が複雑に屈曲しながら建物の周囲に入り込んでいた。

鴛鴦文飾金具は、九体阿弥陀堂の基壇より出土した。向かって左側が折損しているが、他の三辺は残存しており、最大長二五・七センチメートル、幅一一・二センチメートル、厚さ約一ミリメートルである。上辺・下辺は直線状、向かって右側は花卉状に成形され、端部を裏面側に折り曲げている。上辺・下辺に沿って各二箇所、左右の中央に各一箇所の釘孔がある。

材質は銅製で、表面は鍍金され、広く金色の輝きをとどめている。中央に羽根を広げて向かい合う二羽の鴛鴦を毛彫りしており、それぞれの尾羽根は宝相華に変化して上方へ大きく巻き込んでいる。周囲には細密な魚鱗が打たれ、右側には二箇所猪目が穿孔されている。

このような形状からみて、この金具は須弥壇の框などの幅に合わせて打ち付けられた飾金具と考えられる。九体阿弥陀堂には、九体の丈六阿弥陀如来像が安置され、母屋柱には極楽曼荼羅、扉には九品往生図が描かれていたと伝えられる。出土位置からする

と九体阿弥陀堂の須弥壇の装飾の一部であったことは間違いないであろう。

金剛心院の発掘調査では、鴛鴦文飾金具の他にも唐草文の文様部に鍍金を施した細長い飾金具、中央にガラス玉を嵌め周囲には蓮華と蔓からなる文様を配した方形金具、様々な形の瓔珞・鈴・風招などが出土している。これらは平安時代後期に次々と造営され、荘厳を極めた御堂の有り様を伝える貴重な遺物なのである。

京都市考古資料館では、現在、平成二三年度後期特別展示として、「平清盛 院政と京の変革」を開催中である。鴛鴦文飾金具は、この時期を代表する出土遺物の一つとして、一階中央に展示している。今回の展示では、京都における平清盛や平氏一門に関わる遺跡・遺物（西八条第火災層出土遺物ほか）を紹介するとともに、白河から後鳥羽院政期の平安京・京都に起こった変革を、「平清盛と平氏の足跡」・「流通の発達」・「大規模な寺院・殿舎の造営」・「院政期の生活と祈り」の四つのコーナーに分けて考古資料をもとに解説している。期間は平成二四年六月二四日（日）まで。つちの中から明らかになってきた院政期の京都をご覧いただきたい。

京都市考古資料館

京都市上京区今出川通大宮東入ル元伊佐町265-1

Tel. 075-432-3245

ホームページ <http://www.kyoto-arc.or.jp/museum/>

・京都市バス「堀川今出川」停留所下車西へ2分

「今出川大宮」停留所下車すぐ

・入館無料

・休館日 月曜（※月曜が祝日または振替休日の場合は翌日）

年末年始12月28日～1月3日

・開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

【開催中】
「平清盛 院政と京の変革」
2012年6月24日（日）

◆テーマ毎の展示遺跡

・平清盛と平氏の足跡

・蓮華王院・西八条第出土品など

・流通の発達

・日本各地から搬入された土器・陶器、中国や朝鮮半島からの輸入陶磁器など

・大規模な寺院・殿舎の造営

・六勝寺・鳥羽殿・法住寺殿出土品など

・院政期の生活と祈り

・緑釉土製円塔・仏像・経石・薬銘の入る墨書土器など

◆写真・イラストパネル

・法勝寺八角九重塔の復元CG

・院政期の京都マップ

・鳥羽殿・堀河院発掘調査状況など

— MEMO —

書評・紹介一覧 11～2月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事〔敬称略〕
日本古代都市史研究	船簞笥の研究	
(評)『日本歴史』第765号(中村修也)	(紹)『サライ』12月号(住友和子)	
中世京都の空間構造と礼節体系	東寺文書と中世の諸相	
(評)『歴史学研究』第888号(久水俊和)	(評)『地方史研究』第61巻第6号(松永英也)	
御堂関白記全註釈 御堂御記抄／長徳四年～長保二年	京都療病院お雇い医師シヨイベ	
(評)『史学雑誌』第121編第1号(林友里江)	(評)『日本医史学雑誌』第57巻4号(山上勝久)	
一休派の結衆と史的展開の研究	近代医療のあけぼの	
(評)『日本歴史』第765号(原田正俊)	(紹)『日医ニュース』第1212号	
近世東アジア海域の文化交渉	(評)『日本医史学雑誌』第57巻4号(坂井建雄)	
(評)『史学雑誌』第121編第1号(片倉鎮郎)	朝鮮科学史における近世	
近世の環境と開発	(紹)朝鮮新報 11/14(任正嫻)	
(評)『地方史研究』第61巻第6号(高木謙一)	焼畑の環境学	
(評)『千葉史学』第59号(和田麻子)	(紹)しんぶん赤旗 1/29(澤田勝雄)	
(評)『日本歴史』第765号(根崎光男)	古井喜実と中国	
中国五代国家論	(評)日本海新聞 1/7(安藤文雄)	
(評)『東洋史研究』第70巻第3号(毛利英介)	歴史のなかの源氏物語	
近世琵琶湖水運の研究	(紹)朝日新聞 12/11	
(評)『日本歴史』第764号(丹治健蔵)	(紹)京都新聞 12/25	
日本文学の「女性性」	中世長崎の基礎的研究	
(評)『日本文学』第60巻11号(倉田容子)	(記)長崎新聞 2/24(松尾潤)	
(評)『日本近代文学』第85集(江種満子)	近代日本における書への眼差し	
仁明朝史の研究	(紹)『書道美術新聞』第978号	
(評)『古代文化』第63巻第3号(西野悠紀子)	翻訳文学の視界	
戦国期権力佐竹氏の研究	(紹)『週刊読書人』第2928号	
(評)茨城新聞 11/13(糸賀茂男)	近代数寄者のネットワーク	
天龍寺文書の研究	(紹)『茶華道ニュース』第689号	
(紹)『ヒストリア』第230号(山田徹)		

11月から2月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	定価	発行月
九州の蘭学(2刷)	W.ミヒエル・鳥井裕美子・川島真人編	1410-5 C1021	2,625	11
中世長崎の基礎的研究	外山幹夫著	1589-8 C3021	7,875	12
近代日本における書への眼差し	高橋利郎著	1595-9 C3071	5,040	12
動物・植物写真と日本近代絵画	中川馨著	1598-0 C3072	5,250	1
翻訳文学の視界	井上健編	1600-0 C1090	2,625	1
近代数寄者のネットワーク	齋藤康彦著	1603-1 C3076	4,200	1
東国における武士勢力の成立と展開	山本隆志著	1601-7 C3021	6,825	2
平安時代貿易管理制度史の研究	渡邊誠著	1612-3 C3021	7,350	2
天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史	三島暁子著	1609-3 C3021	6,930	2
幕末維新期の陵墓と社会	上田長生著	1604-8 C3021	6,510	2
戦国大名権力構造の研究	村井良介著	1610-9 C3021	7,350	2

11月から2月にかけて刊行した継続図書

シリーズ名	配本 回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	定価	発行月
シリーズ古典再生	3	3	歴史のなかの源氏物語	1423-5 C1021	2,310	11
佛教大学国際学術研究叢書	2	2	仏教と平和	1599-7 C1014	1,575	12
住友史料叢書	26	26	別子銅山公用帳 十番・十一番	1597-3 C3321	9,975	12
佛教大学研究叢書		14	近世上方歌舞伎と堺	1608-6 C3074	6,615	2
新島襄を語る	9	9	マイナーなればこそ	1623-9 C1016	1,995	2

(表示価格は税5%込)

営業部より

▼ソーシャルネットワークサービス(SNS)の発達とともに、読書業界では「ソーシャルリーディング」の試みが模索されています。ソーシャルリーディングとは、「インターネットなどで多くの人と本の感想などを共有する読書法」(Yahoo辞書)だそうです。言ってみれば、リアルの世界の「読書会」や「読書サークル」といったものを、ネット上でより多くの人と行えるということでしょうか。文字にするをたいしたことないようですが、「読書メーター」や「ブックログ」などのサービスに接してみると、確かに読書の可能性の広がりを感じることが出来ます。学術的な試みや出版社による取り組みも始まっているようです。読書の世界はますます増殖拡大しています。(h)

☆二〇一二年刊行図書目録予約受付中
ご希望の方はお電話、ファックス、またはメールで、ご連絡下さい。出来次第、お送りいたします。

☆フェア情報

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。

- ・TEND O 八文字屋 (山形県天童市)
- ・紀伊國屋書店新潟店 (新潟県新潟市)
- ・今井書店グループセンター店 (鳥根県松江市)
- ・ブックデポ書楽 (埼玉県さいたま市)
- ・芳林堂書店高田馬場店 (東京都新宿区)

編集後記

▼いつもお洒落で朗らかな武田先生。お話をうかがっていると、世の中はなんて面白い事柄で満ちているのだろう、という気にさせられます。意識している以上に、人は衣服によつて変わるもの。世界を知るためのヒントがたくさん詰まっています。(須)

▼中山沃先生の『緒方惟準伝』がいよいよ刊行となります。自ら資料を博搜し、洪庵の嗣子・惟準の生涯、緒方家の近代を追った千頁を超える大著は、まさに中山先生の研究人生の集大成。ぜひご覧下さい。(M)

▼また年度末がめぐつて来た。毎年さまたまな慌ただしさのうちに過ぎてゆくが、今年は新たに震災が思い出される年度末となった。慌ただしく過ぎるだけの去年とはちがう一呼吸を経て、今年の春が、やってくる。(大)

▼緊デジ事業はいい機会と考えていますが、思いつく候補は、国会図書館でネット閲覧可能な復刻史料ばかり。東北の皆様のためにも、頭を柔らかくしないといけません。(江)

▼使いふるされた言い回しには残るだけの理由があると再認識。情報過多な現代に、後世に伝えられる「言葉」の重みとは。(I)

▼表紙図版・バルマノーヴァ地図(個人蔵)／『軍事技術者のイタリア・ルネサンス』より

営業部より

☆学会出店情報 小社刊行図書を展示販売

※出店日は変更の可能性有

美術史学会 (國學院大學渋谷キャンパス)

5/18(金) 20(日)

歴史学研究会 (東京外国語大学)

5/26(土) 27(日)

日本科学史学会 (三重大学生物資源学部)

5/26(土) 27(日)

日本医史学会総会 (獨協医科大学)

6/16(土) 17(日)

近世京都学会 (同志社大学今出川キャンパス)

6/24(日)

おうとうふうしん
鴨東通信 四季報 No.85

2012 (平成24) 年 4 月 27 日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

着衣する身体と

女性の周縁化

【4月刊行】

武田佐知子編

着衣という共通の素材を通して、さまざまな社会におけるジェンダーのあり方を考察。多角的に衣服と身体表象について解明。取り上げる素材は、民族・伝統衣装はもちろん「組掛」「魔女」「イランのヒジャーブ」「割烹着」「リカちゃん人形」「マイケル・ジャクソン」「異性装」など、多岐にわたる論文集。

【内容・執筆者】（所属は二〇一二年三月現在）

第Ⅰ部 民族・伝統衣装とファッション 武田佐知子（大阪大学教授／脇田晴子（石川県立歴史博物館館長）／森田登代子（桃山学院大学非常勤講師・国際日本文化研究センター共同研究員）／竹村景子（大阪大学准教授／中本香（同上）／井本恭子（大阪大学准教授／藤原克美（大阪大学准教授／吉岡愛子（上智大学・青山学院大学非常勤講師）

第Ⅱ部 異装・共装 太田妙子（大阪大学教授／津田大輔（滝川高等学校教諭／矢田尚子（東北大学助教）／宮原曉（大阪大学准教授／牟田和男

第Ⅲ部 着衣する身体 宮本マラシ

（大阪大学教授／松村耕光（同上）／藤元優子（同上）／新保淳乃（千葉大学大学院特別研究員）／生田美智子（大阪大学教授／池川玲子（実践女子大学非常勤講師／身崎とめこ（ジェンダー文化研究所研究員）

第Ⅳ部 表現する身体 三好恵真子（大阪

大学准教授）／山崎明子（奈良女子大学助教／福岡まどか（大阪大学准教授／深尾葉子（大阪大学准教授／福岡加谷（千葉大学非常勤講師）／三橋順子（都留文科大学非常勤講師）

▼A5判・五〇〇頁／定価六、〇九〇円

軍事技術者の

イタリア・ルネサンス

【4月刊行】

白幡俊輔著

軍事技術という観点から、ルネサンス期イタリアにおける戦争と社会の関係を考察。具体的には、一五〜一六世紀イタリアの築城術の「理想都市」「軍事的機能」という二つの要素に着目し、その変容過程を、建築家の残した著作や活動・軍事思想からの解明で試みる。

【内容】

第1章 ルネサンス期イタリアの戦争・武器・傭兵 15世紀までのイタリアの軍隊と戦術／武器と築城術の特徴／15世紀イタリア傭兵隊長の戦術改革 傭兵隊長の二つの側面

第2章 フランチェスコ・ディ・ジョルジョの城砦設計と「戦術」 フランチェスコ・ディ・ジョルジョの城砦・ナポリの事例／「重点防御」・フランチェスコ・ディ・ジョルジョの特徴

第3章 ルネサンスの築城術における合理性追求と古典再解釈 フランチェスコ・ディ・ジョルジョの都市計画／軍事的合理性・兵器に対する防御と「側面射撃」／古典再解釈による築城術の変化／「築城術」に秘められた論理

第4章 都市防御を超えて バルダッサレ・ペルッツィー16世紀の「マルティニ派」／「稜堡式築城」の成立／築城術の転機

第5章 築城術と「国家の防御」 戦略「都市の防御」から「国家の防御」へ／マキアヴェッリのフイレントツェ城壁改修計画・政治家思想家の築城術／国防戦略を担う築城術

しらはた・しゅんすけ：京都大学大学院博士後期課程修了、京都大学博士（人間・環境学）。関西学院大学客員研究員。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、八八〇円



近代日本高等教育体制の黎明

田中智子著

交錯する地域と国とキリスト教界

【3月刊行】

医学・洋学一般を教育する場がいかに設置・運営されてきたか。一八七〇年代初頭から一八九〇年代初頭までを対象とし、各地域の高等教育体制の展開過程を、府県という地域行政主体、文部省という国の行政主体、伝道を志すキリスト教界、という三勢力の交錯のうちに描く。高等教育史を府県・国・民間勢力の相互関係史として再構成する一書。

目次

序 未分化時代の地域的力学

第Ⅰ部 キリスト教勢力の出現——地域史としての宣教史

第一章 神戸における近代医療の揺籃とJ・C・ペリー来港

第二章 医療宣教師ペリーと兵庫・飾磨県の行政・社会

第三章 岡山県における医学・洋学教育体制の形成と

アメリカン・ボード

第四章 京都府下の医学教育態勢と新島襄の医学校設立構想

第五章 大阪官立学校とキリスト教

第Ⅱ部 文部省の学校の登場——地域史としての官立学校史

第六章 第三高等中学校設置問題再考

第七章 高等中学校医学科時代の到来

第八章 官立学校誘致現象の生成と変容

第九章 府県連合学校構想史試論

第九章 「官立学校」概念の輪郭

終章 諸学校令下の高等教育体制再編

結—これからの研究に向けて

たなか・ともこ……京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学（日本史学専攻）、京都大学博士（文学）。現在、同志社大学人文科学研究所助教。

▼A5判・四四八頁／定価七、三五〇円

緒方惟準伝 これよし 緒方家の人々とその周辺

中山沃著

洪庵の嫡子で、ボンベ、ボードインらに学んだ惟準は、宮廷医療への西洋医学導入、大阪大学医学部・軍医学校の前身創設、大阪での医療基盤確立などに貢献。自叙伝「緒方惟準先生一夕話」を軸に、著者が博搜した資料とともにその生涯と交遊を詳述。

【4月刊行】

▼A5判・一〇〇八頁／定価一五、七五〇円

近代日本と地域振興 京都府の近代

高久嶺之介著

京都府下の地域社会における様々な要求の噴出や地域改善の動きを、著者自身によるフィールドワークの成果も取り入れながら、交通体系の変化・新技術と議会の導入・地域の人々の活動の問題等を踏まえ、近代の政治行政史と社会史を組み合わせてつづさに描出。

▼A5判・三六四頁／定価六、八二五円

北垣国道日記「塵海」 塵海研究会編

一五年間にわたって京都で続けられたきた塵海研究会の翻刻成果。これまで注目されながらも、必ずしも明らかではなかった明治期地方官の実情を記し、また京都のみならず中央政治史や地方自治・土木史・北海道史研究の進展に寄与する第一級資料。

▼A5判・六五二頁／定価一〇、二九〇円

近代京都研究 丸山宏・伊從勉・高木博志編

歴史都市・京都は、近代に大きく変わったまちであった——。京都という都市をどのように相対化できるのか、普遍性と特殊性を射程に入れたつづ、分野を超えた研究者たちが多数参加し切磋琢磨した京都大学人文科学研究所・共同研究「近代京都研究」の成果。

▼A5判・六二八頁／定価九、四五〇円

新島八重と夫、襄

会津・京都・同志社

早川廣中 (白虎隊記念館館長・元会津若松市長)
本井康博 (同志社大学教授) 共編著

平成25年 (2013)
NHK 大河ドラマ
「八重の桜」
放映決定!

会津藩士の娘として、幕末の会津戦争ではスベンサー銃を手にして戦い、大砲隊を指揮した逸話で知られる新島八重。維新後は京都に向かい、同志社の創立者新島襄の妻となる。洋装を好み、女子教育や篤志教育に邁進した。激動の時代を先進的に明るく生き抜いた八重の魅力を、わかりやすく紹介するはじめての一冊。

◇ 内 容 ◇

カラー口絵
まえがき — 会津人から見た新島八重 — 早川廣中

第1部 概説 笠井 尚

会津烈婦新島八重略伝 本井康博
新島襄と八重が暮らした日々と街 本井康博
もうひとりの新島襄 本井康博

第2部 対談 山本八重子から新島八重へ 早川廣中

第3部 新島八重と山本覚馬の資料 本井康博

【5月刊行予定】

▼四六判・一九〇頁／定価一、二六〇円

マイナーなればこそ 新島襄を語る ⑨

本井康博著 【3月刊行】

「新島ワールド」のコンシエルジェ(案内人)と自他ともに認める著者が、話し言葉でその魅惑の世界を紹介する入門書の第9冊目。歴史のひとこまを飾る不思議な彩りを紹介する一冊。

▼四六判・三二二頁／定価一、九九五円



同志社女学校史の研究

宮澤正典著

現在の同志社女子大学・同志社女子中学校・高等学校の前身「同志社女学校」。その一八七七年創設から一九四五年までについて、新島襄と女子教育、同志社女学校と朝鮮、昭和戦時下の同志社女子部など考察。

▼A5判・三七四頁／定価二、九四〇円



William Smith Clark の

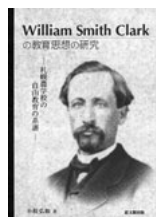
教育思想の研究

小枝弘和著

札幌農学校の自由教育の系譜

「Boys Be ambitious」で知られるクラークの教育思想の全体像を明かす。アメリカに存在するクラーク関連資料や、手紙や草稿類などの活用化されていない資料をも十分に活用し、その教育思想や実践の特質の主要因を究明。

▼A5判・三八〇頁／定価三、一五〇円



—茶会記をひもとく—

逸翁と茶会

逸翁美術館編

4月7日～6月10日に開催される逸翁美術館特別展覧会の展示図録。逸翁（小林一三）は、三井銀行を退社し、箕面有馬電気鉄道（阪急電鉄）を起業した頃、茶道の師となる表千家の生形貴一宗匠と出合い、本格的に茶人としての道を歩み始める。茶の湯との出合いや、近代数寄者としての歩みを、残された茶会記をひもとくながらオールカラーでたどる。

【4月刊行】

▼A4判・九二頁／定価一、〇五〇円



近代数寄者のネットワーク

齋藤康彦著

茶の湯を愛した実業家たち

茶会記録「茶会記」のデータ分析を通して政界・官界・実業界を横断するネットワークを描出。

【内容】茶の湯の復興と近代数寄者の登場／新興財界人の台頭／大寄せ茶会と社会文化事業／キーパーソン高橋義雄の世界／近代数寄者の世代交代／近代数寄者の地域的展開 ほか

【2月刊行】

▼A5判・三〇八頁／定価四、二〇〇円



近代日本における

高橋利郎著

書への眼差し

日本書道史
形成の軌跡
まなざし

毛筆で書かれた肉筆の文字資料が、近代に「書」として位置付けられていく過程を、書道史に関する出版をはじめ、宝物調査や展覧会の列品、文化財関連の法令から探り、書道史形成の軌跡をたどる。

【1月刊行】

▼A5判・三〇四頁／定価五、〇四〇円



動物・植物写真と

日本近代絵画

中川馨著

【1月刊行】

「明治後期から太平洋戦争以前の日本における動物・植物写真」を考察範囲とし、それらの写真集の歴史にもスポットをあてて概説。とくに、京都出身の動物・植物写真家、岡本東洋撮影の写真・写真集群や資料から、多彩な近代美術家たちと写真家との交流を浮き彫りにする。

▼A5判・二五六頁／定価五、二五〇円



近代茶道の歴史社会学

田中秀隆著

「伝統文化とは近代に自己変革に成功した文化である」との近代茶道史テーゼにもとづき、近代国家の文化的アイデンティティの生成構造面から、茶道が「伝統文化」として認知される過程を考察。

【内容】第一部 近代茶道の三つの転換期／第二部 伝統文化の解釈者たち／第三部 茶道への理論的アプローチ

▼A5判・四五四頁／定価六、八二五円

岡倉天心の比較文化史的研究 ボストンでの活動と芸術思想 清水恵美子著

【3月刊行】

本書は、明治時代に美術分野で活躍した思想家、岡倉覚三（天心）一八六三（一九一三）の、特にそのボストンでの活動に焦点をあてて考察。
彼の生涯の活動に通底する思想や、ボストン社会で成そうとしていたことは、いかなるものだったのか。またボストンと日本における岡倉像を比較し、固定化され流布されている「岡倉天心」像を再検証する。

目次

- 序章 渡米前後―欧米美術視察旅行と「自然発達論」
- 第1章 岡倉覚三のボストン・ネットワーク構築
- 第2章 ボストン美術館中国日本美術部経営
- 第3章 オペラ台本『白狐』執筆への軌跡
- 第4章 『白狐』に見る思想と方法論
- 第5章 ボストンにおける岡倉覚三の受容と表彰
- 終章 日米における岡倉像の比較
- 【資料】一八八三年ジョン・L・ガードナーの日本旅行記
しみず・えみこ……お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修士（学術）。専門は比較文学・比較文化・日本文化・思想。現在、お茶の水女子大学特任リサーチ・フェロー。

▼A5判・五四八頁／定価一一、二三五円

フェノロサ社会論集

山口静一編

当時の活字媒体を通じて発表された講義資料、宗教論を含む社会論のすべてを収め、明治日本に多様な影響を与えたフェノロサの画像に迫る。

▼A5判・三三〇頁／定価八、一九〇円

幕末維新期の陵墓と社会 上田長生著

【3月刊行】

畿内に広く散在する陵墓（天皇・皇族の墓）は、幕末維新期の政治変動を受け、大きくその性格を変えていく。

本書では、陵墓に政治的意味を付与し、祭祀を行うおとしする政治権力（朝廷・山陵奉行）と在地社会の軋轢・葛藤が最も明確に現れた陵墓管理・祭祀に注目。

社会における天皇の位置づけや天皇認識を町・村社会の具体的なナレベルから広範囲かつ実態的に描き出し、幕末の天皇・朝廷と社会の関係を解明する。

目次

- 序章
- 第一部 陵墓管理制度・祭祀の形成過程
- 第一章 幕末維新期の陵墓・皇霊祭祀の形成
- 第二章 幕末期の陵墓考証とその「政治化」
——谷森善臣と正田棟隆——
- 第三章 幕末期における陵墓管理制度の形成
- 第四章 維新时期陵墓政策の特質と展開
- 第二部 陵墓管理・祭祀と村・地域社会
- 第一章 陵墓管理・祭祀と村社会
——大和・飯豊天皇陵を中心に——
- 第二章 「聖域」の形成
——南都・開化天皇陵を中心に——
- 第三章 陵墓管理と地域社会
——山陵奉行用達と守戸組合——
- 第四章 朝廷権威と在地社会
——山城国の陵墓を素材に——
- 第五章 近世社会における天皇・朝廷権威とその解体
——河内国石川郡叡福寺を中心に——
- 終章

うえた・ひさお……立命館大学大学院文学研究科博士前期課程修了、大阪学大学院文学研究科博士後期課程修了。現在、日本学術振興会特別研究員（文学）。
▼A5判・四〇〇頁／定価六、五一〇円



『御陵画帖』国立公文書館所蔵より
神武帝「成功」図

近世史小論集

古文書と共に

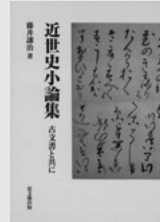
藤井讓治著

【4月刊行】

日本近世政治史研究の泰斗である著者が、研究をはじめたところからごく近年にいたる間に書いた小論のうち、あまり目にとまらないところに収められたもの、入手の困難なものである著者の主要な研究の前提、あるいはその後の展開にかかわる論考を集めた。約40年におよぶ研究の軌跡を振り返る。

ふじいじょうじ：一九四七年、福井県生。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。二〇一二年三月、京都大学を退職。

▼A5判・四六二頁／定価六、三〇〇円



京都雑色記録

〔京都大学史料叢書〕

朝尾直弘編

本記録は上雑色五十嵐氏の諸記録と、下雑色小島氏の留書（日記）をおさめたもので、「雑色要録」の欠落部分をみたとともに、牢屋敷における日常生活・管理の様子を具体的にうかがうことのできる第一級の史料。全三巻ついに完結！

【5月刊】 第三巻 小島氏留書三・五十嵐氏記録

【既刊】 第二巻 小島氏留書一、文政五・一二・一三年、天保八年、弘化

第三巻 小島氏留書二、弘化五年（嘉永元年）・嘉永二年・安政

四年

▼A5判・平均四〇〇頁／定価各一四、七〇〇円

朝鮮科学史における近世

洪大容・カント・志筑忠雄の自然哲学的宇宙論

任正赫著

◆18世紀ドイツで活躍したカントと同時期の朝鮮で、宇宙の構造と生成について論じた学者、洪大容。

◆本書では洪大容の無限宇宙論の宇宙論発展史における意味や朝鮮科学史および18世紀自然科学における位置を検討することによって、洋

の東西を越えて宇宙論の本質を解き明かしていく。

◆付録として洪大容著『璽山問答』の原文と日本語訳を収載。

▼A5判・二八二頁／定価六、三〇〇円



松岡恕庵本草学の研究

じよ あん

太田由佳著

【3月刊行】

近世日本、本草学が博物学的に発展してゆくなかで一翼を担った、京都の本草家松岡恕庵を主題に据え、その学問の実像に迫る本格的な研究書。

【内容】

生涯と学問／恕庵本草学の特徴／学問観／没後一門人たち

▼A5判・三九〇頁／定価七、八七五円

おた・ゆか：一九八二年福岡県生。二〇一一年三月京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士（人間・環境学）。現在、日本学術振興会特別研究員PD。



佛敎大学研究叢書 14

近世上方歌舞伎と堺

齊藤利彦著 【2月刊行】

◇本書は、従来より盛んである元禄期を中心とした近世上方歌舞伎研究から、少し時代を移した元禄期以降の展開、特に上方歌舞伎が特質を大きく転換した化政期から幕末期の実態を究明する。さらに上方歌舞伎の地域的展開や興行史的検討という観点についても考察するが、こうした課題に取り組むうえで重要な興行地として、堺を取り上げる。

◇堺における歌舞伎興行の全貌を説明することで、京・大坂の興行、さらには大芝居、中ウ芝居の役者たちの動向をも照射し、上方歌舞伎の地域的展開の一端を明らかにした。

内 容

- 序 章 研究視点と構成
- 第1章 「興業地」堺の成立と定芝居
- 第2章 近世中期臨町芝居の規模と構造
- 第3章 化政期大寺芝居の興行状況
- 第4章 天保改革令と堺の歌舞伎興行
- 第5章 天保改革後の堺と芸能興行
- 第6章 文久期堺の大寺芝居と説教讀語名代下付交渉
- 第7章 二代目中村富十郎と堺
- 付 論 『堺市史』編纂と二代目富十郎ゆかりの品々
- 第8章 興行地堺と顧客
- （補論1）近世界と助成興行
- 第9章 近世界芝居番付考
- （補論2）堺市立中央図書館所蔵芝居番付（「富十郎番付」）目録

▼ A5判・三四八頁／定価六、六一五円

さいとう・としひこ：一九七一年兵庫県生。佛敎大学大学院文学研究科後期博士課程単位取得満期退学、博士（文学）。佛敎大学宗敎文化コミュニケーション学会員。

藤村庸軒流茶書

頭岑院本（二）

白奇顕成著 【4月刊行】

京都の紫雲山くろ谷金戒光明寺の塔頭である頭岑院には多くの庸軒流茶書が伝えられている。本書には、そのうち三男正員が庸軒の茶話を筆記したと思われる『藤村庸軒茶談』や観山によって定められた庸軒流茶道の基本となる稽古次第を中心に収録。

▼ A5判・五〇〇頁／定価二一、〇二五円

蘭室藤村正員年譜考

庸軒の三男藤村正員（一六五〇～一七三三）の事跡を、自著『蘭室草』の収録作品にそいながら、生涯の動向を歲ごとに明かした年譜考。

▼ A5判・四八〇頁／定価六、〇九〇円

藤村庸軒年譜考（全二冊）

庸軒の生涯の動向を、文献学的方法にもとづき歲ごとに明かした年譜考。茶道を軸とした近世文化史の魅力余すところなく伝える一書。

▼ A5判・一、八四八頁／定価三六、七五〇円

藤村庸軒をめぐる人々

一族の人々・門弟達・儒敎の師や友・茶道の師・医師達との事蹟をたどり、今に続く庸軒流の実態解明を試みる。巻末に「藤村庸軒流系譜」を収録。

▼ A5判・七九〇頁／定価一七、三二五円

しらさき・けんじょう：一九四一年京都・頭岑院に生まれる。京都大学大学院文学研究科修士課程（宗敎学仏敎学専攻）修了。密敎図像学会常任委員。京都花蓮研究会会長。神戸女子大学名誉教授。

風俗絵画の文化学Ⅱ

虚実をうつす機知

松本郁代・出光佐千子・杉子女王編

【4月刊行】



風俗絵画とは虚実をうつす機知の媒体である。美術史・歴史学・文学・文化人類学等の研究者による学際的文化研究。絵画の制作に関わった人々の複雑に絡み合う視線の交錯を文化的に考察し、そこにあらわれた「機知」や「虚実」を往来する機微や感性の「かたち」を明かす15篇。

▼A5判・四五〇頁

定価七、三五〇円

風俗絵画の文化学

松本郁代・出光佐千子編

都市をうつすメディア

中世・近世の風俗絵画のメディア性に着目。描かれなくなったものの持つ意味や享受者の視点等様々な視点からのアプローチ。

▼A5判・三六八頁／定価六、八二五円

〔内容〕	
第1部◆祝祭の視界と権力の描写	狩野内膳筆「豊国祭礼図屏風」論 廣海伸彦／「帝鑑図説」と徳川將軍の「中華」 松島仁／神宮文庫蔵「祇園祭之図」について 八反裕太郎／戦国期京都の祇園会と絵画史料 河内将芳
第2部◆他者の視線と日常の表象	風俗画 タイモン・スクリッチ／喝食の額装 川嶋將生／浮世絵にみる江戸の園芸文化 日野原健司／浮世絵にみる他者の構築 鈴木桂子
第3部◆表現の形象と古典の流通	池上本門寺所蔵「大江山縁起図屏風」小考 岡本麻美／西川祐信の絵本と江戸の艶本 石上阿希／初期団扇絵の事例と宝暦年間の弘法大師信仰の流行について 奥田敦子
第4部◆作品の享受と意匠の変遷	池大雅筆「瀟湘八景図」研究 出光佐千子／英一蝶「四季日待図巻」を読み解く 池田美美／近代京都の光琳派意匠に関する一考察 坂口さとこ／風俗画と京都 杉子女王

田能村竹田基本画譜 (全2冊)

宗像健一編著

図版篇には厳選された140点(カラー95点・モノクロ45点)の作品を大型図版で収録。解説篇には総論と基本作品の詳細を極めた個別解説のほか、題詩・落款・印譜・年譜などを収録。

▼B4変判・総三九八頁／定価二九、四〇〇円

近世京焼の研究

岡佳子著

近世の京焼の窯業的な変遷を文献史料と出土資料から明かし、そこに京焼の名工たちの生涯と作品を位置づけ、その特質を明確にする。京焼陶工の実態から京焼の通史までを見直した一書。

▼A5判・四三四頁／定価六、六一五円

船簞笥の研究

小泉和子著

近世海運において船乗り達が船内に持ち込んで使っていた収納家具、船簞笥。様式史としてではなく、船簞笥自体を歴史を語る史料として試みた意欲的な一書。215点の写真付き詳細データを収録。

▼A5判・四一〇頁／定価六、三〇〇円

松花堂昭乗と

山口恭子著

瀧本流の展開

瀧本流の書について、昭乗の著述した文芸作品、瀧本流の法帖など、文献資料や版本に対して検討。近世の書道史、出版史など広範な研究分野に新知見を提供。

▼A5判・三五六頁／定価九、〇三〇円

室町水墨画と五山文学

城市真理子著

【3月刊行】

室町時代中期の画僧である「岳翁」は、ながらく伝歴不明の画師であった。昭和二年に「蔵丘」という名を持つことが判明したのち、田中一松氏により、周文の弟子であることを示す同時代史料とともに多くの無落款の作品が紹介されている。

本書ではまず、岳翁と東福寺僧了庵桂悟の関係を手がかりに、詩画軸制作のありようを探り、雪舟と関連づけることで、周文の実像に迫ることを試みる。さらに禅僧の文人的営為を反映するものとして、周文筆と伝えられる詩画軸や煎茶図様の水墨画について考察。関連作品を再検討することにより、室町時代の詩画軸における詩と絵画の関係、禅林での詩画軸の制作行程、禅僧の文人意識の絵画への反映を論じ、詩文僧による「詩画軸制作システム」を解明していく。

目次

◆第一部◆

序論 室町水墨画の世界—ある山水図の場合—

第一章 岳翁

—了庵桂悟との関わりにみる

周文派詩画軸制作の様相

第二章 岳翁画の画賛と画題の検討

第三章 雪舟と岳翁—「周文」の記憶—

◆第二部◆

第一章 宝徳二年（一四五〇）の詩画軸制作システム

—伝周文筆「沙鷗図」（鹿苑寺蔵）をめぐる—

第二章 室町水墨画の「煎茶」—文人図様をめぐる—

じょういち・まりこ……九州大学を卒業後、毛利博物館学芸員を経て、大阪大学大学院博士後期課程修了（東洋・日本美術史専攻。博士（文学）。

▼A5判・三三六頁／定価六、三〇〇円



茶の湯と音楽

岡本文音著

茶の湯の美的価値観や性格は、これまで道具や茶室、名物記や茶室の図面などの考証から論じられてきたが、本書では形としては残され得ない「音楽」という視角から、その論考を試みるものである。

室町時代後期の草創期から江戸時代初期の千利休による大成という、茶の湯が発展・拡大へと向かう時代の文献をひもときつつ、「音楽」の世界をとおしてみえる茶の湯の美意識を、大きく能楽、「峯すり」、茶の湯の釜の煮え音「五音ノ湯アヒ」、茶の湯空間における音という4つのトピックから明らかにする。

【6月刊行予定】

▼A5判・三六八頁／定価八、一九〇円

中世蹴鞠史の研究 鞠会を中心に

稲垣弘明著

これまであまり顧みられなかった、室町期以降の蹴鞠会の举行形態の歴史を体系的に論じた一書。とくに応仁・文明の大乱後の一五世紀後半における蹴鞠会について明らかにする。

▼A5判・三〇〇頁／定価五、七七五円

絵巻 大江山酒吞童子・芦引絵の世界

逸翁美術館編

館所蔵「大江山絵詞」（重文）とサントリ美術館所蔵「酒吞童子絵」を全巻カラー掲載し、酒吞童子絵巻の二大系統を対比。お伽草子として広く読まれるようになっていった鬼退治の物語とともに、軍記物の絵巻なども収録。また、館所蔵「芦引絵」（重文）などをも含め、逸翁小林一三の絵巻コレクションを一挙公開。

▼A4判・九六頁／定価一、〇五〇円



日本中世政治文化論の 射程

山本隆志編

編者の指導を受けた執筆者による、歴史学・思想史・民俗・生活史など、多岐にわたる研究成果を取録した論文集。

【5月刊行予定】

第1部 政治制度と実効支配

武家政権と「唐船」―寺社造営料唐船から遣明船へ―(岡周一)／初期足利政権と北野社―御師職を中心に―(山田雄司)／戦国期における足利將軍家元服儀礼の政治的背景(浜口誠至)／沢親音寺所蔵「那須繼図次第」について(阿部能久)／前田家御寶塔―上野国七日市藩の藩祖顯彰と幕藩領主の「大祖廟」―(井上智勝)／下野国黒羽藩主大関家における「御朱印箱」の保存措置について(新井敦史)／新田源氏言説の構造―もう一人の猫絵の殿様・新田由良家を中心に―(山澤学)

第2部 政治権力と地域社会

莊園年中行事論ノート(菊米一志)／鎌倉期武士社会における烏帽子親子関係(山野龍太郎)／中近世転換期における地方修験の存在形態―八槻別当を事例として―(佐々木倫朗)／会津田島にみる戦国期城下町の形成と市・宗教(須賀忠芳)／沼の生業の多様性と持続性―江戸時代の下野国越名沼を対象に―(平野哲也)

第3部 民俗と宗教

宮座儀礼の歴史民俗学的比較研究の課題―歩射儀礼を中心に―(宮部寿樹)／親鸞の来迎観と呪術観―覚信尼における親鸞の信仰の受容を通して―(小山聡子)／「神道集」の歴史民俗(佐藤喜久一郎)／選択され、継承される生活用品の資料性―離村時における当主の対応から―(門口実代)

やまもと・たかし……一九四七年群馬県生まれ。東京教育大学文学部卒業。博士(文学)。

▼A5判・四〇〇頁／定価八、一九〇円

東国における武士勢力の 成立と展開

山本隆志著

東国武士論の再構築
思文閣史学叢書

武士研究は社会経済史的在地領主制論から国家史的職能論へと変化してきたが、それらをふまえた政治史的論究が求められている。本書では、東国武士を武士勢力としてとらえ、京・鎌倉での活動と連動しながら本領で法会・祭礼を主催するなかで政治的支配力を形成していることを、具体的に論じる。

【2月刊行】

▼A5判・三八四頁／定価六、八二五円

戦国期権力佐竹氏の研究

佐々木倫朗著

戦国期常陸国佐竹氏の考察を通して、東国に存在した政治権力の特質や、佐竹氏がどのような過程をへて権力形成を行ったのかなど、戦国期の権力編成の姿を浮き彫りにする。

▼A5判・三〇四頁／定価六、〇九〇円

戦国大名武田氏の権力構造

丸島和洋著

戦国大名甲斐武田氏における「取次」に着目し、領国支配における意思伝達経路の検討とともに、大名と家臣の関係などを見つめ直し、その権力構造を明らかにする。

▼A5判・四三六頁／定価八、九二五円

戦国期関東公方の研究

阿部能久著

公方発給文書の様式変化にみる権力構造の実態、寺社勢力との関係、関東公方家の後裔である喜連川家の幕藩体制下の位置、さらに武家放実書「鎌倉年中行事」の成立背景を探る。

▼A5判・三二〇頁／定価五、九八五円

室町期東国社会と寺社造営

小森正明著

鎌倉府体制下にあった室町期の東国社会に、寺社造営事業と寺社領経済が与えた影響を考察する。「香取文書」など中世東国の「売券」の長年にわたる分析に基づく成果。

▼A5判・三五六頁／定価七、三五〇円

思文閣史学叢書

戦国大名権力構造の研究

村井良介著

戦国大名権力の動向は、近世に向けて一貫した過程と捉えることができるのか？ 本書は、主に毛利氏を事例に、戦国大名、「戦国領主」の重層的な権力構造の分析から、戦国期の権力諸関係の特質を、理論的かつ実証的に描くことにより解明する。



序 章 戦国期大名権力研究の視角

第一章 毛利氏の山陰支配と吉川氏

第二章 毛利氏の山陰支配と小早川氏

補論一 「小早川家座配書立」について

第三章 毛利氏の「戦国領主」編成とその「家中」

第四章 一六世紀後半の地域秩序の変容

第五章 戦国期における領域的支配の展開と権力構造

補論二 中近世移行期における大名権力の性格づけをめぐる

終 章 戦国期の特質を考えるための権力試験

むらい・りようすけ……一九七四年生。神戸大学大学院人文科学研究科特命助教。

【3月刊行】 ▼A5判・四五二頁／定価七、三五〇円

京都の都市共同体と権力

仁木宏著

思文閣史学叢書

中世京都の都市構造モデルを前提に、その変容のなから町（ちょう）の成立を読み解く。中近世移行期における自治、共同体、権力の葛藤を正面から見すえ、都市の本質を具体的に、理論的に分析した一書。

▼A5判・三三二頁／定価六、六一五円

阿蘇下野狩史料集

飯沼賢司編

「下野狩神事」は、源頼朝の富士の巻狩りの手本となったとされており、阿蘇家最大の重要行事であった。その史料である、『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』とその関連文書、阿蘇家所蔵下野狩関連史料を翻刻。

永青文庫所蔵『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』の解題

阿蘇家所蔵下野狩関連史料の解題

一 永青文庫所蔵下野狩関連記録

1 下野狩日記 上（二）

3 下野狩旧記抜書（二）

二 永青文庫所蔵下野狩関連文書

1 下野三狩矢野茂左衛門覚書写

3 宮内権大輔真樹書状

5 下野狩由来写

三 阿蘇家所蔵下野狩関連史料

1 天保十三年下田能延へ送る抜書写

3 下野御狩三物替事

5 下野狩并山神祭作法写

7 下野狩由来記写

9 鷹山下野御狩鹿立鹿藏地名比定書

史料の用語・地名等の解説／阿蘇系図／下野狩関連地名推定図

【5月刊行予定】 ▼A5判・三三八頁／定価七、八七五円

中世長崎の基礎的研究

外山幹夫著

中世長崎、特に肥前国西南部の松浦郡・高来郡・彼杵郡に着目し、松浦氏・有馬氏などの在地武士団の成立・発展、領国支配の実態や南蛮貿易の推移について論じ、その独自性を明かす。長崎大学名誉教授の著者が長年の研究成果をまとめた一書。

▼A5判・四二四頁／定価七、八七五円

祇園祭の中世

室町・戦国期を中心に

河内将芳著

【5月刊行予定】

室町期の都市京都を文字どおり代表する祭礼であった祇園祭（祇園会）を通して、中世京都を考える。祇園会の見物という行為の検討により、その特質をうきばりにし、さらに神輿渡御の神幸路・御旅所と都市空間との関係、戦国期の祇園祭の再興の意味や、「闖取」の実態についても解き明かす。

I 祇園会の見物

第一章 室町期祇園会と公武政權―見物をめぐって―

第二章 祇園会を見物すること―室町期における―

II 神輿渡御・御旅所・駕輿丁

第三章 中世の祭礼と都市空間

第四章 祇園会神輿駕輿丁と今宮神人―室町・戦国期における―

第五章 再興された祇園会

第六章 戦国期祇園会の再興と佐異

第七章 「戦国期の祇園祭」論―豊かなイメーヂと史実の間隙―

第八章 山鉦巡行・風流・闖取

第九章 祇園会山鉦圖取考―戦国期から近世前期にかけて―

第十章 乗牛風流と鶴鉦に関する考察

第十一章 南都祇園会に関する二、三の問題

第十二章 かわうち・まさよし：一九六三年大阪府生。現在奈良大学文学部教授。

▼A5判・三五〇頁／定価四、七二五円

中世京都の空間構造と礼節体系

桃崎有一郎著

中世の京都で実践された礼節体系の考察を通じて、中世京都の空間構造を明らかにし、室町殿権力の形成・展開過程をも論ずる。

▼A5判・五八四頁／定価七、五六〇円

天皇・将軍・地下楽人の室町音楽史

三島暁子著

【2月刊行】

南北朝・室町時代を通じて天皇・将軍が学び権威のシンボルとなった「笙」、その位置づけの変化は、音楽や音楽の関わる儀礼、またそれに携わる人々といかなる展開をもたらしただのか。本書では、天皇家・将軍家の笙の御師範として重要な役割を果たした地下楽人豊原氏の南北朝期から約一五〇年にわたる活動に着目し、公・武・楽家という三者の関わりの中から、権威に密接にかかわった音の文化を論じる。

I 南北朝・室町時代の笙の楽家豊原氏

第1章 豊原嫡流嫡家の継承をめぐって―豊原英秋の偉人説話―

第2章 笙の楽家豊原の龍秋流と惟秋流―室町時代の豊原系図鈔の比較から―

II 足利将軍家と笙

第3章 将軍家天神講と奏楽

第4章 将軍が笙を学ぶということ―南北朝・室町時代の足利将軍家と醍醐寺法身院―

III 後光厳流天皇家と笙―追善儀礼を中心として―

第5章 南北朝・室町時代の宮中御八講

第6章 御機法講への転換と定着―視る莊嚴から聴く莊嚴へ―

第7章 南北朝・室町時代の追善儀礼と公武関係

IV 笙の公武御師範と豊原家嫡流

第8章 三代の御師範豊原緑秋

第9章 豊原統秋と『體源鈔』研究の展望

▼A5判・三六〇頁／定価六、九三〇円

みしま・あきこ：武蔵大学大学院博士課程単位取得退学、博士（人文学）。現在、日本女子大学文学部学術研究員ほか。

平安貴族社会の秩序と昇進

佐古愛己著

▼A5判・五四〇頁／定価八、一九〇円

律令国家体制が維持されていた平安初期から平安末・鎌倉初期までを射程として、貴族社会の構成と編成原理を解明する。その素材として、人事・昇進制度、特に叙位制度に注目。従来検討が不十分だった律令官司制の変質、中世国家機構の形成過程との有機的な関連を追究する。

xof・あいみ…

立命館大学非常勤講師。

平安時代貿易管理

渡邊誠著

制度史の研究

海商の貿易活動を国家が管理する「制度」を中心にして、その消長を明らかにすることで、新たな貿易史像を呈示する。

▼A5判・三九六頁／定価七、三五〇円

禁裏・公家文庫研究 第四輯

田島公編

▼B5判・四〇四頁／定価九、六六〇円

近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の語文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データベースを収載するシリーズの第四輯。今回は柳原家旧蔵本、陽明文庫所蔵資料の目録の翻刻も収録。

【目次】

第一部

- 「言談抄」の三伝本の関係 三角洋一
- 「大日本史編纂記録」の史料的特質 鍛冶宏介
- 近世朝廷における公日記について 村和明
- 東山御文庫所蔵「日本紀略」と禁裏文庫の「日本後紀」 志村佳名子

第二部

早稲田大学図書館所蔵「先秘言談抄」の書誌と翻刻

- 三条西家旧蔵『禪中記抄』 田島公
- 宮内庁書陵部所蔵九条家本 中町美香子
- 「定能卿記部類」八「興福寺供養」 藤原重雄
- 「公卿補任」正中元年条の復原 宮崎康充

第三部

- 翻刻「近衛家記録十五箇目録」(昭和十五年四月) 尾上陽介
- 陽明文庫所蔵「兵範記」紙背文書目録 尾上陽介
- (十五箇之内第十一函及第十二函) 田島公

- 陽明文庫所蔵『勘例』内容目録 西尾市岩瀬文庫編
- 西尾市岩瀬文庫 柳原家旧蔵資料目録(A)(B) 小倉慈司
- 宮内庁書陵部所蔵柳原家旧蔵本目録(稿) 小倉慈司
- 宮内庁書陵部所蔵九条家旧蔵本目録(稿) 小倉慈司

【既刊】

- 第一輯 ▼B5判・三九〇頁／定価一〇、二九〇円
- 第二輯 ▼B5判・四〇六頁／定価一〇、二九〇円
- 第三輯 ▼B5判・四九六頁／定価一二、三九〇円

仏教と平和

佛敎大学国際
学術研究叢書2
第21回国際仏敎文化学術会議実行委員会編

二〇〇九年、韓国・圓光大学に
おいて「仏教と平和」をテーマ
として開催された第21回国際
敎文化学術会議の基調講演なら
びに研究発表を収録。



佛敎大学国際学術研究叢書2
仏教と平和

第21回国際仏敎文化学術会議実行委員会編



思文閣出版

現代の社会問題を仏教に問う (梁銀容)
— 国際仏敎文化学術会議40年の回顧 —
仏教と平和 (水谷幸正)
「いのち」と「共生」をもとに (康東均)

仏教と平和
— 安心と平安への道 —

日本における戦争と宗教 (原田敬一)
世界倫理と三同倫理の脈絡和用 (金容煥)

戦争は罪悪か? — 20世紀初頭の
日本仏教における非戦論 — (大谷栄一)
宗教の両面 — 葛藤と平和 — (韓乃彰)

【1月刊行】

▼A5判・二四二頁／定価一、五七五円

生命論と靈性文化 仏教への問い

第20回国際仏敎文化学術会議実行委員会編

佛敎大学国際学術研究叢書1

二〇〇七年に佛敎大学 (京都市) にて開催された「第20回国際仏敎文化学術
会議」の基調講演および研究発表を修正・加筆し、研究成果として刊行。

▼A5判・二二二頁／定価二、一〇〇円

西山浄土教の基盤と展開

五十嵐隆幸著

日本仏教を基盤に日本浄土教の祖師や、浄土宗の開祖法然の浄土教義、さら
に門弟の證空や行観を中心に西山教義をまとめる。

▼A5判・三一〇頁／定価四、二〇〇円

大本山くろ谷 發行 宝物総覧

金戒光明寺
当山には、仏像・仏画・仏典・古文書など、多くの
文化財が蔵されている。約五七〇点の宝物全点
をF M スクリーン高精細印刷による、オールカ
ラーの大型図版で後世に残す。

▼A4判変・五一六頁／定価二九、四〇〇円



法然伝承と民間寺院の研究

平祐史著

民間寺院に伝わる開創・宗祖伝承、地名、史料等の考察を通じ、浄土宗教義
の変容や民俗信仰との関係を解明。民間寺院における近世化の実態に迫る。

▼A5判・四四四頁／定価九、四五〇円

日本近世の宗教と社会

菅野洋介著

奥州と関東を主に、戦国期以降の仏教・神道・修験道・陰陽道等と地域社会
とのかかわりを、東照宮や寛永寺といった幕府権威をも視野にいれて考察。

▼A5判・三八〇頁／定価八、一九〇円

禿氏文庫本

大取一馬 責任編集

禿氏祐祥博士寄贈の文庫は、梵文経典や日中の仏書、真宗史・仏教美術に関
する典籍、絵画等多岐にわたる。善本に値するものを選び、影印として刊行。

▼A5判・六七四頁／定価一四、七〇〇円

『観経疏之抄』玄義分中

豊田元彦 監修・西山禅林学会 發行 浄土宗叢書第一卷

西山国師 (一一七七〜一二四七) が『観経疏』講述の際、門弟の観鏡證人 (一
一九五〜一二四四) が筆録した『他筆抄』といわれる文献の影印研究。

▼B5判・二〇六頁／定価五、二五〇円

美の縁

び

よすが



暗がりの中、梁を支える柱の影で、人知れずそっと胸を押さえる僧形の人物が一人。伏せられた眼差しに、淡く朱がさされた頬や鮮やかな紅に染まる唇は、その胸中にあるものが恋の悩みであることを想像させます。

明治から昭和を生きた画家・酒井三良は、同郷の坂内青風に師事して絵の手ほどきを受けた後、小川芋銭など日本美術院同人と親交を結び、その中心的画家の一人として活躍した人物です。福島県出身の三良は、故郷である雪国の情景を描いた作品で注目されたのをはじめ、生涯を通じて日本の豊かな自然とそこに生きる人々の姿を描き、純粹で情緒豊かな独自の世界を切り開きました。

本作が描かれた大正八年、二十一歳

❖ 春 悩 ❖

酒井三良

の三良は、国画創作協会の第二回展に出品した《雪に埋もれつつ正月はゆく》で入選を果たしています。

画面の右下、僧が佇む堂の欄干を隔てた先には、闇の中で満開の桜が灰白い輝きを放っています。眼下に広がるのは、静寂に包まれた春の夜の町並みでしょうか。遠景のいかにも平和で牧歌的な景色と、前景の恋に騒ぐ胸を押さえる人物とのコントラストが、見る者に劇的な印象を与えます。田園・農村画家という既存のイメージを覆す、希少な主題が描かれた本作は、作家の新たな魅力を発見できるこの上ない資料であると言えます。

(営業総務・蒲裕美子)

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 355

TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533

<http://www.shibunkaku.co.jp/>

info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・
古地図・錦絵などから学術書全般に至るま
で、あらゆるジャンルの商品を取り扱って
おります（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部ま
でお問い合わせ下さい。



奈良絵本
住よし

全三帖

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 355

TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155

<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>

e-mail kosho@shibunkaku.co.jp

美術品を売る、買う。

「思文閣大交換会」が
いちばんの方法です。

思文閣大交換会は、年4回の大入れ会。
美術品を売りたい方、買いたい方双方に
ご満足いただいております。

詳細・お問い合わせは

思文閣京都本社

TEL (075)531-0001

mail info@shibunkaku.co.jp

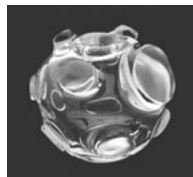
ぎやうりん 思文閣 5ヶ月個展

三嶋りつ恵

ドルチェヴィータ

Ritsue Mishima

DOLCHEVITA



5月14日（月）～5月27日（日）

10:00～18:00 会期中無休

京都市東山区古門前通大和大路東入る元町 386

TEL(075)761-0001 FAX(075)533-1779

<http://www.shibunkaku.co.jp>

gallery@shibunkaku.co.jp